

【論 文】

大学生のスピリチュアルペインに寄り添う場づくり —よつやカフェデモンク爽風庵を通して—

安井 優子 (社会福祉学科特任助教)

抄録：本稿の目的は、筆者が2024年4月に本学社会福祉学科着任後、研究室を開放し開店した「よつやカフェデモンク爽風庵」（以下爽風庵）の活動記録を基に、本学科においてその場がもつ意味を明らかにすることである。爽風庵の起源であるカフェデモンクの背景や、2024年4月～12月末までの学生の来店状況及びその実践について文献をふまえて考察した。その結果、爽風庵の取り組みは「人間に根源的意味を与える場」（木原 2003:178）を創造する実践であり、本学科において爽風庵という場が開かれているということは、ソーシャルワークの存在意義を示す上でも重要な意味をもつことが明らかとなった。また爽風庵は、実習という共通テーマを共有する社会福祉学科生にとって、安心して居ることのできる場所となりつつあることが示唆された。今後は実践を継続する中で、さらに調査研究を重ね、本学科においてその場がもつ意味を再考していく必要がある。

キーワード：大学生、スピリチュアルペイン、スピリチュアリティ、カフェデモンク、場

I. 本稿の背景・目的

現在日本は、少子高齢化の加速や経済格差の拡大により、先行きが見えず、社会全体に閉塞感が漂う状況と言える。それは若者の意識にも影響を与えている。日本、米国、英国、中国、韓国、インド6カ国の17歳～19歳の男女各1,000名（無作為抽出）を対象とした「18歳意識調査」（公益財団法人日本財団 2024）によると、自国の将来について「良くなる」と回答した者は、日本では「15.3%」であり、6カ国中最下位となっている。また、「自分のしていることには目的や意味がある」、「将来の夢を持っている」、「自分は他人から必要とされている」、「自分には人に誇れる個性がある」という質問でも、日本は他国に差をつけて「同意する」との回答が少ないとの結果が報告されている（公益財団法人日本財団 2024）。

その最たる問題に若者の自殺の問題がある。日本では若年層の死因は自殺が最も多く、大学は自殺対策の推進を課題としている。文部科学省（2023）が全国の国立大学86校、公立・私立大学1,036校を対象に実施した「死亡学生実態調査」によると、自殺またはその疑いにより死亡した学生287人のその理由は「不明（209人）、学業不振（27人）、病気の悩み（21人）、進路に関する悩み（20人）、親子関係の悩み（16人）、孤立感・孤独感（10人）、学友・教員との人間関係（9人）、恋愛関係の悩み（6人）、生活苦（3人）、就職失敗（2人）（複数回答）」（文

部科学省 2023) の順に多くなっている。最も多い理由が「不明」である背景には、質問紙調査では解読できない多様で複雑な問題が複合的に絡み合っていると推測する。そのように現代社会では、生きる意味や目的、人生の価値を見出すことができない痛みを抱えて苦しむ若者の増加が危惧される。この痛みは、自己存在の意味や生きる意味を、様々な人間関係や人間を超えるものとの関係性からも見出すことが出来ない痛み「スピリチュアルペイン」であり、「日常生活の中で常に表出されるものではなく、危機的状況で顕在化する痛み」(藤井 2015: 70) とされる。教職員の目には一見問題なく映る学生であっても、表出できないスピリチュアルペインを抱え、人知れず苦悩している可能性がある。現代の学生を取り巻く様々な問題の背景を掘り下げると、必ずそこには自己存在の意味や生きる意味が見出せないスピリチュアルペインが存在すると考える。大学生の自殺対策として、そのようなスピリチュアルペインをふまえた上で「不明」の背景を究明することが重要と考える。一方、自殺学生のうち「学内保健管理施設の関与は 19.2%」(文部科学省 2023) に留まる。学内保健管理施設のみならず、教職員を含め大学全体で更なる学生の支援体制を整えることは喫緊の課題であると考ええる。

エリクソンのライフサイクル理論によると、青年期である大学生の発達課題は「我々は何者か、何者になろうとしているのか」(Erikson=2001: 158) という自己のアイデンティティの確立である。この時期に自分は何者かという実存的同一性に混乱を生じ、その意味を見出せないことは、学生にとって危機的状況と言える。エリクソンはそれを「心理・社会的危機」(Erikson=2001:34) と示す。しかし、人間を身体・心理・社会的存在のみならず、スピリチュアリティも含めて全人的存在と捉えるならば、それは心理・社会的危機であると同時にスピリチュアリティの危機でもあると言える。

日本の私立キリスト教系総合大学人間福祉学部で長年「死生学」を教える Fujii は、「幼稚園から受験を強要する親が増え、競争を強いる日本の教育制度の中で、多くの若者が生きる意味を失い、人生に疲れている」(Fujii2023:2) と指摘する。現代の大学生は、幼少期から競争社会の中で効率よく優秀な成績・成果を修めることで親や周囲から認められ、そのことにより自己を肯定しながら生きてきた者が多いと推測する。スピリチュアルペインは「人生のライフサイクルの転換期に顕在化しやすい」(藤井 2015:70) とも言われるが、大学生は青年期から成人期への転換期でもあり、特にスピリチュアルペインが顕在化しやすい時期と言える。学生 1 人ひとりが、他者の評価には拠らず、自分なりに自己存在の意味や生きる意味を見出していけるよう、その過程に寄り添う支援が重要と考える。

筆者は、2024 年 4 月に本学社会福祉学科に着任後、研究室を週 3 日開放し、学生がいつでも気軽にふらっと立ち寄り、ほっと一息つける場所、安心して居ることのできる場所として「よつやカフェデモンク爽風庵(そうふうあん)」(以下爽風庵)を開店した。本稿の目的は、2024 年 4 月～12 月末までの爽風庵の活動記録を基に、本学科においてその場がもつ意味を明らかにすることである。学生の来店状況及びその実践について文献をふまえて考察し、本学科においてその場がもつ意味と今後の課題を提示する。

Ⅱ. スピリチュアリティとスピリチュアルペイン

スピリチュアルペインについて論じる前に、スピリチュアリティについて定義する。日本のソーシャルワーク（以下SW）では、2020年6月改定の倫理綱領で新たな原理として「Ⅵ（全人的存在）：ソーシャルワーカーは、すべての人々を生物的、心理的、社会的、文化的、スピリチュアルな側面からなる全人的な存在として認識する」（日本ソーシャルワーカー連盟2020）を明文化した。それはSWが前提とする人間観は、スピリチュアリティを含めた全人的人間理解であるということを示している。しかし、日本のSW研究ではスピリチュアリティに関する研究自体数少なく、スピリチュアリティについての議論は不十分な状況と言える。

スピリチュアリティとは何かを明らかにするために、スピリチュアリティの定義に関する議論、またスピリチュアリティと関連する概念である宗教とスピリチュアリティとの関係について、そしてスピリチュアリティに関する理論・実証研究レビューを行った。その結果、示唆されたことは次の通りである。カンダら（2014）や木原（2010）、藤井（2015）の定義の共通点は、スピリチュアリティは「その本質として人間存在の『意味』を指向し、その機能として『関係性』を指向するもの」（藤井2015:54）であり、本質と機能からスピリチュアリティを捉える点にある。カンダらはスピリチュアリティのホリスティック・モデルを提唱し、スピリチュアリティの3つの性質「① Spiritual aspect（人間の側面）、② Wholeness（人間の全体性）、③ Center（人間の中心）」（Canda and Furman=2014:130-31）を示している。それらのことから、スピリチュアリティは、人間存在の根源的意味の指向に関わる本質部分と、その意味を関係性の中で見出そうとする機能部分、そしてその本質と機能を含む全体性から成る包括的な広い概念と解釈される。

また、カンダら（2014）、木原（2010）、藤井（2015）、西平（2003）、島蘭（2010）ら各研究者の共通見解として、スピリチュアリティの特質は、人間を超えるものとの関係性として示される「超越性」にあると示唆される。ウィルバー（1996, 2008）は人間発達の中でも、特に自我超越的（トランスパーソナル）な発達過程に着目し、インテグラル・スピリチュアリティ理論を構築している。そのように、人間存在の根源的意味を人間関係のみでなく、人間を超えるものとの関係から見出そうと指向する性質はスピリチュアリティの重要な特質と理解できる。

一方、カンダら（2014）、脇本（1997）、鈴木（2010）、岸本（1961）、ジェイムズ（1969）、ティリッヒ（1979）らの文献からは、スピリチュアリティは、狭義の意味での制度的宗教と、広義の意味での人間の生きる意味や生き方としての宗教の両方を包含する概念であり、全ての人間の根源的意味への欲求に応答可能な概念と解釈される。人間存在の根源的意味は、人間関係と、宗教を含め自然や宇宙、文化や歴史、死者や先祖との関係といった人間を超えるものとの関係を通して指向されるものと理解できる。

さらにカンダらは、スピリチュアリティは人間の本質に関わり「私たちの全ての側面に浸透し、統合性、全体性の感覚を生み出す」（Canda and Furman=2014:132）性質をもつと示している。スピリチュアリティは、自己の内面に向かうことで、自己や他者・世界との関係性に気づきをもたらす、集団や社会で人と人との関係を深める働きへと向かう。それと同時に、「国家や国

際社会，地球生態系，宇宙，究極的实在との関係性」(Canda and Furman=2014:45)といった超越的世界へと向かう働きでもある．そのようにスピリチュアリティは，超ミクロから超マクロの世界まで同時双方向に働き，全人としての人間がつながるあらゆる世界全体を包摂するものと理解できる．

それらの文献研究から，本稿ではスピリチュアリティとは，「人間存在の根源的意味の探求に関わるものであり，その意味を自己と自己・他者といった人間関係中心の関係だけではなく，人間を超えるものとの関係から見出そうと指向する性質をもつ．スピリチュアリティは宗教を含む．またそれはどんな要素にも還元されず，人間存在の全体を包括するという性質をもつものである」と定義する．

またそのようにスピリチュアリティを，人間存在の根源的意味を人間関係や人間を超えるものとの関係から見出そうと指向するものと捉えると，スピリチュアリティの痛みであるスピリチュアルペインとは，「人間存在の根源的意味を，どのような人間関係や人間を超えるものとの関係からも見出せないことによる痛み」と定義できる．

スピリチュアルペインには「普遍性，潜在性，主観性」(藤井 2015:68)の3つの特徴がある．「普遍性」とは，スピリチュアルペインは，年齢や性別，国籍，病や障害の有無に拠らず，全ての人間がもつ痛みであることを表している．「潜在性」とは，スピリチュアルペインは「死や病・障害，人間関係・経済的破綻といった危機的状況時に顕在化する痛み」(藤井 2015:70)であり，日常では表出されにくい潜在的な痛みであることを示している．そして「主観性」とは，スピリチュアルペインは，「治療や投薬，カウンセリングや専門的介入によって取り除けるものではなく，苦しむ本人が主観的に意味を見出すことでしか解決できない痛み」(藤井 2015:71-2)であることを意味している．

安井 (2018) は，東日本大震災による死別体験者が苦しみの中で求めるものは何かを明らかにすることを目的とし，震災で愛する家族と死別した人を対象に質的研究を行っている．その結果，死別体験者が苦しみの中で求めるものは，「苦しみに対し自分なりに意味を見出すこと」(安井 2018:59)であることを導き出している．またその苦しみとは「生きる意味がわからない苦しみ，自分だけが生き残ったことに対する罪責感の苦しみ，孤独の苦しみ，自己のアイデンティティに関わる苦しみ」(安井 2018:62)という自己存在の意味を見出せない苦しみ，すなわち，スピリチュアルペインであることを明らかにしている．

一方，上田 (2006) は，学生のスピリチュアルペインの存在と，その構成概念を明らかにすることを目的とし大学生を対象に量的研究を行っている．その結果，「スピリチュアルペインは学生にも存在する」(上田 2006:155)と報告している．そしてその構成概念は「自己に対する不信，価値体系の崩壊，無条件の愛・受容の不在，死の苦しみと孤独」(上田 2006:155)であると示している．

日本ではスピリチュアリティは，WHO の「健康の定義改正案」(厚生労働省 1999)でスピリチュアリティを含めた全人理解の必要性が謳われ，WHO の緩和ケア定義に導入されたこと

を機に、終末期医療分野を中心に発展してきた。その為、スピリチュアルペインについても「死にゆく人や終末期の人に特有の問題」（藤井 2015:68）として捉えられる傾向にある。しかし、安井や上田の研究からも、スピリチュアルペインは終末期の人に特有の痛みではないということが理解できる。

フランクは「人間存在はその最も深いところでは、究極的には受難（Passion）であり、それが人間の本質である。つまり人間は苦悩する者、ホモ・パティエンス（Homo Patience）である」（Frankl=1972:121）と述べ、人間は人間であるが故に苦悩する存在であると示している。仏教でも「一切皆苦」という言葉で、「すべての『行：人間存在を含めたあらゆる現象』は、『苦』である」（浅野 2014:150）という教えが説かれている。それらのことから、そもそも人間は全人としてスピリチュアルな存在であり、スピリチュアルペインがあるからこそ人間であるという理解が重要と考える。学生のスピリチュアルペインと対峙する際には、スピリチュアルペインがあるなら、それを取り除けば良いというメディカルモデルの視点（Cure）や、生活者としての学生とその家族へのケアというバイオサイコソーシャルモデルの視点（Care）ではなく、スピリチュアリティ、スピリチュアルペインをもつ全人として学生を捉え、「苦しみの意味を見出していくことや、人生を死を含めて受けとめていくことを関わる側が見守る（Being= 寄り添い）」（藤井 2015:96）ことを目的とするバイオサイコソーシャルスピリチュアルモデルの視点から、ありのままの学生を理解することが重要である。そして学生同様に、自らも根源にスピリチュアルペインをもつ同じ人間として関わる姿勢が大切と考える。

Ⅲ. よつやカフェデモンク爽風庵の概要

1. カフェデモンクの成り立ち

次に、爽風庵の起源であるカフェデモンクの成り立ちについて論じる。カフェデモンクは、2011年3月11日に発生した東日本大震災直後から、宮城県栗原市の住職・金田諦應師らが始めた傾聴移動喫茶活動である。宗教・宗派を超えた宗教者たちがアウトリーチで被災地に出向き、避難所や仮設・復興住宅の集会所等で、茶やケーキを無料提供しながら、被災者の話を傾聴する移動式のカフェである。そこでは特定宗教の布教や伝道は一切禁じられている（金田 2021; 安井 2018）。カフェデモンクの目的は、「破壊され、凍りついた時間と空間を再び繋ぎ合わせ、ともに未来への物語を紡ぐ」（金田 2024）ことにある。大勢の人々が、想定外の出来事を前に、「喜怒哀楽の感情が凍りつき、未来への物語を紡げなくなる」（金田 2022:12）という状況に陥った。そのような中で金田師らは、「瓦礫の中でホッとする空間・安心して泣ける場所、凍りついた心が溶け、再び未来への物語が動き出す場所」（金田 2024）としてカフェデモンクを開き、人々の悲しみ・苦しみを傾聴する活動を開始したのである。カフェデモンクの入口には、次のようなメッセージボードが置かれている。

「Cafe de Monk はお坊さんが運営する喫茶店です。Monk は英語でお坊さんのこと。

もとの平穏な日常に戻るには、長い時間がかかると思います。

『文句』の一つも言いながら、ちょっと一息つきませんか？

お坊さんもあなたの『文句』を聴きながら、一緒に『悶苦』します」(金田 2021:26)。

そのメッセージボードが示すように、金田師らは活動開始当初から、凍りついた心が溶け、再び物語を紡いでゆけるには、長期的展望が必要であるということを自覚している。また、文句を聴きながらともに悶苦するとの表明からは、金田師らは前提として、人々の悲しみ・苦しみを取り除く Cure や、ケアする人－される人という援助関係に基づく Care の視点から場を開くのではないという姿勢が読み取れる。一方的に答えを差し出すのではなく、根源に痛みを抱える同じ人間として悲しみ・苦しみを分かち合いともに在り続ける姿勢、すなわち、カフェデモンクは Being (= 寄り添い) を大切に開かれた場であると理解できる。その根本的な傾聴姿勢は金田師の「何もできないけど、いつも共にいる。『not doing but interbeing』それが私たちの役目であり、被災された方たちに対する敬意なのです」(金田 2021:306)という言葉からも伺える。

カフェデモンクは、震災発生から 13 年間、甚大な被害を受けた宮城県沿岸部を中心に「45 カ所、計 450 回」(金田 2024) 開催されており、2 万人以上の被災者の声を傾聴している。そして 14 年目を迎える今も活動を継続中である。また各地の宗教者・医療福祉関係者から、自分たちの地元でもカフェデモンクを開店したいと希望があり、現在、能登半島を含め、北海道から熊本まで全国 13 カ所にその活動は拡大している(金田 2021)。さらに、金田師の地元・宮城県栗原市では、カフェデモンクと訪問看護ステーションの協働で、医療・福祉・介護職者や利用者の愚痴、苦労話を傾聴する「カフェデモンク・ピース訪問看護ステーション」が開店し地域に定着している。また、生活困窮者・就労支援事業所との協働で「カフェデモンク・みんなのおうち」を開店し、心の病を抱え苦しむ人々の傾聴活動、居場所づくりを展開している(金田 2022)。

2. よつやカフェデモンク爽風庵の開店

(1) 研究者の背景

次に爽風庵の開店経緯を論じる前に、筆者の研究者としての背景について述べる。その理由として、質的研究では Reflexivity が重要とされている為である。Reflexivity とは「研究者自身の持つ特性が研究に反映すること」(大谷 2019:7)であり、「研究者が調査研究に持ち込む自らのバックグラウンドがいかに自らの解釈を形作っているか、研究参加者が研究をどう経験しているか、そして読者がいかに研究に反応するかについて自己理解に取り組むこと」(Creswell&Bazes=2022:313)を意味する。研究者である筆者自身の個人的経験やバックグラウンドが、爽風庵開店に際し、どのように関与しているのかを記述することは、「省察可能性(reflectability)」(大谷 2019:7)を高め、今後の実践を高めていけることにつながると考える。

筆者は、学生時代に両親ががんを患った経験から看護師になりたいと望み、主に緩和ケアの領域で約14年間看護業務に従事してきた。そして同僚として出会った緩和ケア医の夫ががんで37歳の時に看取った。死別後、生きる意味を失い悲嘆に暮れる中思い出したのは、生前夫が語っていた「これからの未来を生きる若者に、いのちの大切さを伝えていってほしい」という言葉であった。これまで多くの患者・家族や、夫との出会いから教わってきたことを、自分の言葉で伝えていける自分へと成長し生きていきたい。その為にもう一度大学で死生学やスピリチュアリティを学び直したいという思いが湧き上がり、死別翌年38歳の時に、関西圏の私立キリスト教系総合大学人間福祉学部にて1年生から入学した。学部では死生学の他、精神保健福祉士養成カリキュラムを受講し、社会福祉・精神保健福祉・SWの世界との新たな出会いが与えられた。それまでの人間の身体を中心に患者の全体を捉える看護の視点に加え、人生と生活といのちの根源的側面から、環境の中にあるクライアントを全人的に理解するSWの視点を学び、人間や世界について広い視野で全体的に思考する力が培われた。

続いて大学院では、夫の縁の地でもある東北で、東日本大震災による死別体験者の苦しみをテーマに修士論文研究に取り組んだ。夫の1周忌にあたる2011年3月に東日本大震災が発生し多くの人々が犠牲となった。大切な人をただ1人失っただけでも、1年経ってもまだこんなにも悲しくて辛いのに、何人もの大切な家族や仲間、その上仕事や住居まで一挙に失った東北の人々の苦しみはどれ程のものかと胸が締めつけられた。そのような中、カフェデモンクの活動を知った。想像を絶する苦しみの中で人々は何を求め、何を生きる支えとしているのか、現場で教わりたいと考え、震災後5年目にカフェデモンクでフィールドワークを行わせてもらうことになった。

筆者の中で印象深く心に残る瞬間がある。それは参加2回目の時の出来事である。仮設住宅の住民7～8名が座るテーブルの端で、深い苦悩を抱える住民に対し、どのように関われば良いか筆者が戸惑っていると、金田師がテーブルにきた。そして「皆さん、ここにいる安井さんもお主人を亡くされているんだよ」と筆者のことを紹介してくれた。金田師がそう言い終わるや否や、住民の姿勢が前のめりになり、その眼差しが一斉に筆者に注がれた。「あんたまだ若いのに、あんたも辛い思いしてきたんだね」、「辛かったね」、「大変だったね」、「この人もね、こないだ仮設でご主人亡くされたんだよ」と、1人ひとりが心の底から心配し言葉をかけて下さった。自分の悲しみの比ではない悲しみ・苦しみにある人たちが、まるで自分のことのように心から筆者を案じてくれる—その温かな思い・優しさが有難く、胸が震えるほど熱くなった。そしてその瞬間、双方の距離が一気に縮まり、互いに強く引き寄せ合うような感覚を覚えた。「被災者」と「研究者」ではなく、大切な人を亡くした悲しみ・苦しみを背負い生きる人間同士として、一瞬にして互いの深い部分で通じ合うような感覚だった。そのことを機に、住民も筆者に自身の被災・死別経験についてきかせてくれるようになり、インタビュー調査にも協力してもらえることになった。

筆者は毎年3.11には現地で皆と一緒に死者に祈るときを大切にしている。皆と祈りながら、

いのちの大きな源の部分では、死者と生者は時空を超えてつながっていることを実感する。東北の人々に、互いに根源にスピリチュアルペインを抱える人間同士として傍にいてを許してもらい、苦悩や喜びを分かち合いながらともに歩ませてもらってきたことに感謝でしかない。東北の温かい人々や、自然、伝統文化を通して人間を超えるものとのつながりを肌で感じ、人間や世界について宇宙的観点から捉える視点を与えられたと感じている。今ふり返ると、亡き夫に導かれるようにして出会った東北・カフェデモンクという場を通して、筆者は死別の悲嘆で凍りついた心が溶かされ、再び未来への物語を紡ぎ始め出すことができるようになった自分が在ることに気づかされる。スピリチュアルケアは、「ケアする」、「ケアされる」という類のものではなく、後から自身が歩んできた過程をふり返った時に、しみじみとそれを受けてきた自分に気づかされる、そのようなものであるということを教わった。

2024年3月11日に石巻市の復興住宅集会所で開かれたカフェデモンクでは、集まった地域住民の前で、筆者自ら4月から本学科に着任することになったと報告する機会が与えられた。現地の人々は自分のことのようにともに喜び、温かなエールで送り出してくれた。

(2) よつやカフェデモンク爽風庵

そのようにして、筆者は2024年4月から本学科に着任することになった。その際、与えられた任務の1つに「社会福祉学科生の実習に関する相談を聴いてほしい」という内容があった。筆者は学生の話に耳を傾けることは自身の使命であると受け取った。研究室を開放し、学生たちが、いつでも気軽にふらっと立ち寄り、不安や愚痴を吐き出すことができる場所、ほっと一息つける安心できる場所を開きたい―筆者の中で東北カフェデモンクのイメージが浮かんだ。そして金田師から「よつやカフェデモンク爽風庵」の看板を暖簾分けしてもらえる運びとなった。「爽風庵」は金田師が命名してくれた名であり、「ソフィア」との掛詞である。またそのコンセプトは「神の叡智は風の中にあらわれる」である。悩みを抱える学生たちが、爽風庵の場を吹き抜ける風の中に神の叡智を感じ取り、それぞれに人間（自己）存在の意味や生きる意味を見出してゆくことのできる場であることを理念としている。

また、金田師は全国のカフェデモンクに、「苦悩している人々に寄り添ってほしい。そういう居場所を作ってほしい」（金田 2021:275）という願いを込めて手製の看板を贈っており、爽風庵にも看板を寄贈下さった。看板からは、東日本大震災で亡くなった大勢の人たちの思い、死別の悲嘆とともに生きる東北の人たちの思いが伝わってきて、その思いを受け継ぐ重みと責任を強く実感する。

爽風庵の開店は週3日である。開店時間は日により異なるが1日に2～4時間開店している。「色とりどりのケーキに、暖かい珈琲と冷たい飲み物。美しい花とお香。花には花言葉を添える。花言葉は会話を動かす小道具となる。カフェのBGMは、セロニアス・モンクの素敵なジャズ…（省略）」（金田 2021:27）。そのような東北カフェデモンクの場をイメージしながら、研究室の無機質な机にテーブルクロスを敷き、看板と花を飾る。香を焚き、BGMをかけ、茶と菓子

を用意する。入口の扉を開き、暖簾をかけると爽風庵開店となる。学生には、教学支援システム Loyola の掲示板で、実習相談が可能な筆者のオフィスアワーとして告知された。また、筆者が担当する実習指導や演習等の授業でもチラシを配布し告知するようにした。そのように、2024 年 4 月 22 日から爽風庵は開店した。

(3) 場所を整える工夫

筆者は、爽風庵という場を整える工夫として、金田師の傾聴の場づくり 3 原則「①場所を開く、②場所をほぐし自分をほぐす、③場所に仕掛ける」(金田 2023) の実践を心がけている。まず①についてであるが、爽風庵では、仏教では「慈悲の心」、キリスト教では「隣人愛」という言葉で表される自己から湧き上がる「切に他を想う心」(金田 2019:206) を傾聴の第一歩として大事にしている。学生と教員という立場の違いや肩書きに囚われずに、根源に痛みをもつ同じ人間として、学生とともにそこに在り、ともに悩むという姿勢を大切にしている。少しでも学生のことを理解したい、力になりたいという祈りに近いような思いを持ちつつも、その苦しみを完全に理解することはできないという限界をもつ自己であることの自覚を大事にしている。それでも少しでも力になりたいと思う自己と対話し葛藤する中で、なお「そこに踏みとどまる『耐性』、そこに『居る事・居続ける事』」(金田 2022:13) が重要であると受けとめている。どんな時にも変わらず、爽風庵という場所を開き続けること、そこに居るということを基本的に大事にしている。

次に②についてであるが、カフェデモンクでは、金田師らはいつも暇げな佇まいで居ること、真面目な軽ろみを大切にしている。金田師は「忙しげに立ち回っている人に、誰も自分の心の内を話そうとは思わない」(金田 2019:34) と語る。自身に問うてみても確かにそのような人に大事な話を打ち明けようとは思わない。心に痛みを抱える人は特に、ケアしてあげようという下心で上から目線で近づいて来る人の前では、心を開かないということをカフェデモンクで教わった。その為、爽風庵でも庵主として学生の悩みを何とかしようという下心満々で聴くのではなく、何気ない日常会話や雑談を大切にしている。雑談の中で、ふとした瞬間にこぼれ落ちる学生の抱える痛みや苦しみを逃さないように、暇げな佇まいで居て、その瞬間を待つようにしている。精神医学者のフランクは、アウシュビッツの強制収容所生活の中で「自己維持の為の闘いにおける心の武器」(Frankl=1961:131-2) として、ユーモアを大切にしていた。そのことをふまえ、金田師らは被災地でも「苦しい時・辛い場所にこそ遊び心(ユーモア)を忘れない」(金田 2024) 姿勢を大事にしている。まず自分がほぐれていなければ、爽風庵を訪れる学生もほぐれないし、そこは学生にとって安心して居ることのできる場所にはならない。その為、庵主として筆者自身も真面目な軽ろみと遊び心を忘れずに、爽風庵という場、そこで学生と紡ぐ時間を心から楽しむことを大切にしている。

そして③についてであるが、カフェデモンクでは先述したように、花に花言葉を添え、会話を動かす契機としたり、カフェの BGM にはカフェデモンクとの掛詞でもあるセロニアス・モ

ンクのジャズを流したり、「スタッフ同士『ガンジー金田』や『UFO 吉田』といったニックネームで呼び合う」（金田 2022:13）等、至るところに人々の心をほぐす工夫が仕掛けられている。爽風庵でもそれに倣い、季節や行事に合わせて花を飾ったり、テーブルクロスの色を変えたり、棚のアイテム（物）を模様替えるようにしている。慌ただしい日常の中で、学生たちがふと足を止め、四季の移ろいを感じ取ることができるよう工夫している。また、棚のアイテムには、東日本大震災で亡くなった人たちの思いのこもった物も多数ある。そのようなアイテムたちをともに愛で、ともにその空間に身を置くことによって、学生たちに人間を超えるものとのつながり、死者と生者とのつながりを感じ取ることのできる感性を養う機会にしてもらいたいと願いをこめている。金田師は傾聴の場には、「時間・空間の固定化を排除する限りない『開放性』、あらゆる時間・空間を引き寄せる『寛容性』」（金田 2024）が必要であると語る。爽風庵が、時間・空間を固定化せず、常に流動的で開放的な場であれるよう意識している。そして目に見える人と人との関係のみならず、死者と生者との関係、人間を超えるものとの関係にも気づくことのできる、あらゆる時空を包摂する場であれるよう、常に場を整える工夫をしている。

IV. 結果

(1) 学生の来店状況

爽風庵の活動記録から、爽風庵開店の 2024 年 4 月 22 日から同年 12 月末までの社会福祉学科生の来店状況について報告する。2024 年度の社会福祉学科学生は総数 272 名（1 年生 61 名、2 年生 66 名、3 年生 62 名、4 年生および在学継続者 83 名）である（上智大学 2024）。そのうち 2024 年度に社会福祉実習を実施した学生は 39 名（主に 3 年生）であった。また 2025 年度に実習予定の学生は 37 名（主に 2 年生）である。学生たちは 1 年次入学以降、社会福祉学科の様々な科目（必修科目、福祉政策運営管理系科目、福祉臨床系科目、社会福祉分野科目等）を履修しながら、2 年次で次年度に社会福祉実習を履修するか否か、つまり実習に行くか否かを選択・決定する。そして実習希望者は 3 年次で実習を行うというのが通常の流れである。爽風庵は、そのような学生たちの実習に関する相談に応じる場として開店した。

爽風庵開店から約 8 ヶ月間で、学生の来店者は実人数 47 名、延べ人数 132 名である。1 年生 4 名、2 年生 13 名、3 年生 19 名、4 年生および在学継続者 11 名である。また一人あたりの来店頻度は、1 回が 26 名、2 回～13 回のリピーターが計 21 名である（表 1）。また 1 回の来店につき、一人あたりの滞在時間は、平均 1 時間 18 分、最長 3 時間 50 分であった（表 2）。学生が爽風庵を訪れる際には、事前のアポイントメントは必要なく、いつでも気軽にふらっと立ち寄って良いというスタイルにしている。誰でも立ち寄って良いし、立ち寄りたくない場合は寄らなくても良い。

暖簾をくぐり、最初は緊張した面持ちで訪ねて来る学生も、爽風庵の看板や花、棚のアイテムたち、そして心地よい香りや音楽に歓声を上げ、思わず表情を綻ばせる。温かい茶を淹れ、ともにテーブルを囲む。一緒に茶と菓子を楽しみつつ、室内のアイテムに関することや何気な

い日常会話から対話が動き出す。実習に関する相談事の背景には、学生の家族関係やこれまでの学生生活等、幼少期から今ここに至るまで、それぞれの学生の人生の物語が存在する。筆者は学生を一人の人間として少しでも知りたい、理解したいという気持ちで耳を傾ける。学生が爽風庵に居る間だけは、ほんの一時でも日常から開放され、一息ついてもらえるように願いながら傾聴する。

学生の話は、実習に関すること以外にも、進路や就職、留学、授業やゼミ、課題や試験、教員のこと、部活やサークル、ボランティア活動、アルバイトのこと、家族関係、友人関係、恋愛、趣味のこと等、多岐にわたる。雑談を通して語りが展開する中で、時折、それらの話題の背後に潜む学生のスピリチュアルペイン—例えば、自己と他者とを比較し自己を肯定できない苦しみ、人生の意味や目的、希望が見出せない苦しみ、自己や他者を許すことのできない苦しみ、孤独、後悔の念、家族や友人等の病や障害・死に伴う悲嘆や不安、漠然とした不安等—が顕れる。筆者は学生の言葉を否定したり、善悪を判断したり、自己の価値観を押し付けないように注意しながら、学生をありのまま丸ごと受けとめるように耳を傾け、ともに悩む。

基本的に爽風庵で学生から聴いた内容は口外しないことを原則としている。しかし、心身の不調等、実習に際し他の教職員とも共有する必要があると判断される情報については、学生から了承を得た上で、他の教職員とも共有するようにしている。

開店後、複数の学生から「こんな場所を求めていました」、「これまで大学の中にこんなふうに居れる場所がなかった」、「授業時間以外で先生と話が出来ることが嬉しい」、「事前にアポイントメントを取らなくても良いからハードルが低い」といった声が聴かれた。次第に友達を連れて来る学生や、同級生の口コミを聴き訪れたという学生、繰り返し立ち寄る学生が現れる。そして、学年の異なる学生同士が、爽風庵を通して出会い、上級生が下級生に実習やゼミ、卒論、就職活動、留学に関する助言をしたり、下級生からも上級生に質問を行う等、学年を超えて互いに交流する様子が伺えるようになる。それぞれ様々な背景・人生の物語をもつ学生同士が、互いに触媒し合うことでプラスの化学反応が起こり、新たな力が生み出されるような瞬間がある。その場全体が何か大きなものに包まれるような一体感を覚え、深い喜びを共有する。

そのうち、ある学生から、自宅にある使用していないコーヒーマーカーを爽風庵に寄贈させて欲しいという申し出があった。「ここを訪れる学生に是非そのコーヒーマーカーで美味しい珈琲を淹れてあげてもらえませんか。私にとっても誰かと何か分かち合わせてもらえることは喜びなのです。これまで（喜びを）分かち合えることがなかったので…」と真剣な眼差しで語るその思いを受けとめ、感謝の意を伝えると、学生は喜び自宅からコーヒーマーカーを持参してくれた。また「皆で一緒に食べて下さい」と紅茶や菓子等を差し入れしてくれる学生や、「爽風庵に飾って下さい」と自身の手芸・編み物の趣味を生かし、季節に応じたハンドメイドのマスコット・壁飾りの作品を寄贈してくれる学生もいる。その他、自主制作の福祉に関するフリーペーパーを爽風庵に設置してほしいと希望する学生が現れ、訪れる学生がいつでも手に取れるよう設置することになる。そのように、少しずつ学生たちが主体的に爽風庵の場づくりに参加

する様子が見受けられる。

開店から約8ヵ月が経過する中で、ふとした瞬間に「ここに来たらほっとする」、「ここでは素の自分で話が出来る」、「爽風庵が拠り処になっている」と言葉を漏らす学生がいる。ある学生の「これまで両親以外の大人と、こんなふうに色々ゆっくり話をする機会がなかった」という言葉が深く胸に刺さる。先述した金田師の言葉のように「忙しげに立ち回っている人に、誰も自分の心の内を話そうとは思わない」（金田 2019:34）ものである。効率性や生産性が第一優先の現代社会の中で、おそらく学生たちが出会う大人たちは、大学でもアルバイト先でも皆、余裕無く忙しくしていると想像できる。そのような大人たちに対して学生たちは心の内を話すどころか、声をかけるのさえためらうことが多いのだらうと推測する。対等な関係で安心してゆっくりと話せる大人の存在が不在である社会に気づかされる。

表1 学生の来店回数（N=47）

来店回数（回）	人数（名）
1	26
2	9
3	3
6	1
7	1
8	4
12	1
13	2
合計	47

表2 学生の滞在時間（N=132（延べ人数））

滞在時間	人数（名）
1 時間未満	54
1 時間以上 2 時間未満	49
2 時間以上 3 時間未満	22
3 時間以上	7
合計	132

V. 考察

(1) 本学科における爽風庵という場がもつ意味

日本の社会福祉とスピリチュアリティ研究の第一人者である木原は、SW について次のように定義している。

「SW とは、人々が社会生活上において『健康的で文化的な』ウェルビーイング (Well-being) を達成することができるように、ソーシャルワーカーが、専門的な知識と技術をもって、その必要があると認められるものの生活上の諸問題を解決していく実践のプロセスであり、また予防的に、そのような福祉社会が恒常的に実現できるような『場』を創造する実践の総体を指す」(木原 2003:10)

木原が、SW が対人援助において精神医学や臨床心理学と一線を画すその意義として特に強調するのは、「『場』の創造」(木原 2003:178) という点である。またその場とは、自然発生的な場ではなく、「意図的に組織され、創造される」(木原 2003:177) 場であり、単なる物理的空間ではなく、「人間に根源的意味を与える場」(木原 2003:178) である。

先述したように、爽風庵は実習相談を前提に開かれた場であるが、苦悩する学生たちが、爽風庵の場を吹き抜ける風のなかに神の叡智を感じ取り、それぞれに人間存在の意味や生きる意味を見出してゆくことのできる場であることをコンセプトに創造した場でもある。実習に関する悩みの背景に様々な痛みを抱える学生たちが、アポイントメントなしに立ち寄り、学生と教員という関係を脇に置き、庵に立ち寄る客と庵主として出会う。またその場に居合わせた学生同士も、実習という共通テーマを共有しつつ、学年やゼミ、サークル等の所属の違いを超え、爽風庵を訪れる客同士として出会い、ともに互いの思いや考え、経験を語り合う。誰の評価も気にせず、気楽に愚痴をこぼし合う。爽風庵という空間と時間をともに共有し交わり合う中で、それぞれの物語が動き始める。スピリチュアリティの特徴として「人は経験によって自己の存在意味を獲得するという性質」(藤井 2020:4) があるが、大学時代にそのような心地良い空間を肌で体感する経験は、学生にとって、人間(自己)存在の根源的意味を見出し得る貴重な機会の一つになると考える。

SW の目的は本来「利用者の社会生活機能を高め、その人の望む生活(生きる)を支援すること」(小原 2019:12) にある。「『生活』は英語では『Life』であるが、『Life』には『人生』や『いのち』という意味」(安井 2019:46) があり、SW は単に生活を支えることのみでなく、人がよりよく生きることを支えることを目的としている。しかし、さらに言えば、多死社会の現代において、SW は人の生のみではなく、人の死や死別後の「Life」にも関わる対人援助専門職である。人の死を「全ての関係性の終了ではなく、死者と生者との間に新たな関係性が生まれる」(藤井 2015:98) ものと捉え、スピリチュアリティを含めて全人として人間を捉えるバイオサイコソーシャルスピリチュアルモデルの視点に立てば、SW は死を含めたよりよい生を支えることを目的とすると言える。東日本大震災を機に被災地で始まったカフェデモンクの傾聴の場、その姿勢を受け継ぎ、震災で亡くなった大勢の人々や、死別後の悲嘆を生きる人々の思いをのせて開店した爽風庵は、時空を超えて死者と生者とがつながり包摂される空間でもある。目には見えない死者の存在、死者の力に支えられながら、その場に集う学生たちは、そこに「居る」ということだけで、もうすでに死者との関係において意味を与えられた存在である。学生

は目に見える人と人との関係のみではなく、目には見えない死者と生者との関係を通して、自己のスピリチュアリティやスピリチュアルなストレングスにも気づいていくことのできる可能性に開かれている。またそれは学生のみでなく、学生も庵主も双方が、互いのスピリチュアリティ、スピリチュアルなストレングスへの認識を深め、死をも含めて互いがともに生きてゆく力を支えることにつながると考える。そのように爽風庵は、「人間に根源的意味を与える場」(木原 2003:178)の創造の実践であり、本学社会福祉学科において、爽風庵という場が開かれているということは、SWの存在意義を示すうえで、重要な意味をもつと考える。

また現在の大学生は、後期学童期から青年期への移行期に、COVID-19感染拡大防止策の影響で、人と「『場』」を共有することの制限、共に『居る』ことへのためらい」(金田 2022:14)を強いられてきた学生である。対面での対話が欠落する時間を生きてきた学生の中には、人との直接的なコミュニケーションや関係構築に困難を感じる学生も少なくない。医療ソーシャルワーカー(以下MSW)の島野らは「MSWのSW支援における課題は、患者との時間をかけた対話のプロセス、科学的理論や技術に基づく実践と共に、専門職という枠組みをも超えた人間同士の温かい関わりである」(島野ら 2014:127)と論じている。直接的なコミュニケーションを不得手とする学生が、爽風庵という場を通し、立場を超えた人間同士の温かい交わり、安心して居れる場を実体験できることは、将来学生が対人援助者として、もしくは一人の人間として、他者と信頼関係を構築し、安心できる場所を自ら開いていくことのできる契機になると考える。

(2) 居場所としての意味

SWの実践の場のみならず、教育の場においても、まずは教員がSWの究極的価値として「人間の変化、成長及び向上の可能性に対する信念」(Butrym=1989:63)を明確にもつことが重要である。本稿では爽風庵開店から約8ヵ月間の学生の来店者数及び来店回数、滞在時間について報告した。社会福祉学科生総数272名に対し、来店した学生の実人数は47名(17.3%)と2割に満たなかった。しかし実習を実施もしくはその予定の学生(2・3年生計76名)のうちでは、来店者数(来店した2・3年生の人数)は32名(42.1%)と半数近くにはのぼる。また来店回数は、1回が26名であるが、2回、3回、6回、7回、8回、12回、13回と繰り返し立ち寄る学生も計21名おり、それらの学生たちにとっては、爽風庵という場が少なからず、学内における1つの居場所となりつつあると言えるのではないかと推察する。滞在時間については、1時間未満が54名、平均滞在時間は1時間18分であったが、1時間以上～3時間を超えて滞在する学生も計78名ある。それらの学生にとっては、爽風庵という場が安心して居ることのできる場所となりつつあるのではないかと考える。

ひきこもり研究を専門とする石川は、居場所について「そこにいとホッとできて元気になる。無理せず自然体でいられる。そういった場所や関係性を広く指す概念である」(石川 2021:152)と示している。爽風庵を訪れる学生の中には、休学から復学したもの、下級生と

同じ教室に居ることに居心地の悪さを感じている学生もいる。先述した学生の「ここに来たらほっとする」、「ここでは素の自分で話が出来る」、「爽風庵が拠り処になっています」という言葉からも、爽風庵は社会福祉学科生にとって1つの居場所としての役割を果たしていると言えるのではないかと考える。また石川は「居場所が〈居場所〉になっていく為には、そこにいる皆の協力が必要である…（中略）そこにいる皆で居心地のいい時間と空間を一緒に作り上げていくことが〈居場所〉作りの秘訣」（石川 2021:159-62）と論じている。爽風庵開店から8ヵ月が経過する中で、来店する学生たちからは、主体的に場づくりに参加・協力する姿勢が伺えるようになっていく。それは爽風庵を皆の居場所にしていきたいという学生の積極的な意志を表すものと言えるのではないかと考察する。

一方、爽風庵という場を通して、学生が自己存在の意味を見出していけることや人間的成長を遂げていけることに貢献できる為には、長期的な展望が必要と考える。石川が「会が変わらずに開かれていて、どれだけ間が空いても気持ちよく迎え入れてもらえること。それが居場所が〈居場所〉になるための条件の一つ」（石川 2021:170）と示すように、短期間で成果を出すことを目標とするのではなく、長期的視点で、どんな時にも場を開き続けることが大切と考える。実習や大学生活、人間関係が順調な時には寄らなくても良い。ただ学生がどうしても辛い時、苦しい時に、ふと思ひ出し、立ち寄れる場所がそこに変わらず開かれているということが重要である。来店者数や再来店率は関係なく、たった一人の為であっても、爽風庵が開かれていることで何か救いとなる学生が居るなら、それだけで開店している意味はあると考える。

哲学者の鷺田は「求められたからでも業務でもなく、誰かの為、何かの為という意識も無しに、言葉はなくともただ茶を共に供するだけの行為がもたらす深い充足感」（鷺田 2015:84）について言及している。爽風庵で庵主として来客した学生に茶を淹れる間共有する僅かな沈黙の時間、そして互いに茶を一口含み、思わずほっと細めた目を重ね合わせる瞬間は、鷺田の言う深い充足感に包まれるような時間である。ただ茶を供するという行為を通して、鎧を脱いだ同じ人間としての姿がそこに顕れる。ともにその時間と空間を共有しながら「居る」ということは、互いの存在を無条件に受け入れ肯定し合う瞬間とも言える。だからこそもたらされる充足感があるのではないかと考察する。

ニューヨークの病院で長年チャブレンとして死に直面する人々の苦しみを傾聴してきた岡田は、心を持ち生きる人間が「居る」ということの価値について言及している。ともに「居る」ということは「お互いの存在、『居てくれてありがとう』と感謝したくなるような存在感を十分に体験する」（岡田 2024:22）ことであると論じている。金田師らがカフェデモンクの傾聴活動で大切にしている「何もできないけど、いつも共にいる『not doing but interbeing』」（金田 2021:306）というあり方は、鷺田や岡田が示すただ「居る」ことの重要性を体現している実践と言える。そのようなカフェデモンクのあり方を継承する爽風庵が、学生の居場所として、ただともに「居る」ことを何より大切に開き続けていける場であることを目指している。

(3) Reflexivity

次に、研究者としての筆者の背景が、爽風庵の実践活動や研究にどのように影響するのかについてリフレクシブに考察する。先述したように、筆者は人生を通して、人間の尊厳や価値、病気、医療、死と絶えず密接に関わってきたと言える。また夫との死別後、大学に入学し、20歳以上年齢差のある若者たちと、同じ学生の立場として12年間ともに過ごしてきた。筆者はそれらの経験や出会いを通して、他者や死者、人間を超えるものをつなぎ、その中で支えられ生かされてきた自己が在ることを自覚している。しかし、そのような経験があることにより、かえって学生が抱える痛みや苦しみに共感しすぎたり、自己のバイアスがかかり、飛躍的に解釈しがちな面があると省察する。

藤井は寄り添いについて「自らの価値観を問われながら、目の前の人をありのまま受け止め、そして何もできないことを了解した上で、なおそこに在ること」(藤井 2015:194)と示している。筆者は、自身の個人的経験やバックグラウンドが、いかに自己の研究や教育、実践活動に反映され、その結果や考察、解釈に影響を与えているかを絶えず自己省察し続ける必要がある。また、研究者である前に一人の人間であり、自らの主観性を完全に排除することはできないということを自覚しておくこと、そして自身の判断や解釈の可謬性を絶えず謙虚に自覚しておくことが重要と考える。常に自己の価値観を問い、自己の限界を引き受けながら、なおその場所に居て、目の前の学生をありのまま受けとめ続けることが、学生のスピリチュアルペインへの寄り添いを可能とする場づくりの必須条件と考える。

VI. 結び

本稿の目的は、爽風庵の活動記録を基に、本学科においてその場がもつ意味を明らかにすることであった。爽風庵の起源であるカフェデモンクの背景や、爽風庵開店から約8ヵ月間の学生の来店状況及びその実践について文献をふまえて考察した。その結果、爽風庵の取り組みは「人間に根源的意味を与える場」(木原 2003:178)を創造する実践であり、本学科において爽風庵という場が開かれているということは、SWの存在意義を示す上でも重要な意味をもつということが明らかとなった。また爽風庵は、死者と生者がつながり包摂される空間でもあることから、学生が目に見える人間関係のみではなく、目には見えない死者との関係を通して、自己のスピリチュアリティやスピリチュアルなストレングスに気づいていける可能性に開かれた場とも言えることが示唆された。そして爽風庵は、実習という共通テーマを共有する社会福祉学科生にとって、学内において安心して居ることのできる場所となりつつあるということが理解できた。

本稿の限界としては、データの提示が爽風庵開店から1年に満たない短期間での学生の来店状況の報告に留まった点が挙げられる。また爽風庵の実践活動には、研究者である筆者自身のバックグラウンドが自ら関わり、その実践においては一人間としての自らの主観性を完全に排除することはできず、その判断・解釈には可謬性がある点が挙げられる。今後の課題として、

爽風庵を継続し開店する中で、調査研究を重ね、本学科における爽風庵という場のもつ意味を再考する必要がある。また庵主として爽風庵で知り得た学生の個人情報において、特に実習に関わり他の教員と共有が必要と判断される情報について、どこまでどのように共有するのかという点についても検討を重ねる必要がある。そして筆者自身、今年度は入職1年目で担当科目も少なかったが、今後担当科目が増えることで必然的に教員として成績評価に関わる機会が増すことになる。それでもなお爽風庵という場においては、互いの立場を越えて同じ人間として対話を行えること、学生が安心して居ることのできる場を開き続けていけることが課題である。

謝辞

本稿執筆にあたり、東日本大震災で亡くなられた多くの人々の魂の平安を心より御祈り申し上げます。東北・カフェデモンクの皆様、カフェデモンクマスター・ガンジー金田師に深く感謝申し上げます。そして爽風庵を見守り下さる本学科教職員の皆様、爽風庵を訪れてくれる学生の皆様に厚く感謝申し上げます。

参考文献

- 浅野孝雄（2004）『古代インド仏教と現代脳科学における心の発見－複雑系理論に基づく先端的意識理論と仏教教義の共通性－』産業図書
- Butrym, Z.T. (1976) *The Nature of Social Work*, The Macmillian Press. (=1986, 川田誉音訳『ソーシャルワークとは何か』川島書店)
- Canda, E.R. and Furman, L.D. (2010) *Spiritual Diversity in Social Work Practice : The Heart of Helping, Second Edition*, Oxford University Press. (=2014, 木原活信・中川吉春・藤井美和監訳『ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か－人間の根源性にもとづく援助の核心』ミネルヴァ書房)
- Creswell, W. J. and Baez, C. J. (2021) *30 Essential Skills for the Qualitative Researcher, Second Edition* : SAGE Publications, Inc. (=2022, 廣瀬真理子訳『質的研究をはじめするための30の基礎スキル－おさえておきたい実践の手引き』新曜社)
- Erikson, H. E. and Erikson, M. J. (1997) *The Life Cycle Completed A Review Expanded Edition*. W.W.Norton & Company, Inc., New York. (=2001, 村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル, その完結〈増補版〉』みすず書房)
- Frankl, V.E. (1947) *Ein Psycholog Erlebt Das Konzentrationslager, Österreichische Dokumente zur Zeitgeschichte I*, Verlag für Jugend und Volk, Wien. (=1961, 霜山徳爾訳『夜と霧－ドイツ強制収容所の体験記録』みすず書房)
- Frankl, V. E. (1950) *Homo Patiens, Versuch einer Pathologie Zehn Thesen über die Person*, Deuticke. (=1972, 真行寺功訳『新版 苦悩の存在論－ニヒリズムの根本問題』新泉社)

- 藤井美和 (2015) 『死生学と QOL』 関西学院大学出版会
- 藤井美和 (2020) 「ソーシャルワークとスピリチュアリティー死生学から見る人間理解ー」『ソーシャルワーク実践研究』 11, 2-14.
- Fujii, M. (2023) *University Students' Views on Life and Death : Analysis of a Death Education Program in Japan*, Kwansai Gakuin University Social Sciences Review, 28, 1-21.
- James, W. (1901-02) *The Varieties of Religious Experience. A Study in Human Nature*, Longmans, Green & Co. (=1969, 梶田啓三郎訳『宗教的経験の諸相 (上)』 岩波書店)
- 上智大学 (2024) 「2024 年度学部生数」 (<https://www.sophia.ac.jp>, 2025.1.26)
- 石川良子 (2021) 『『ひきこもり』から考えるー〈聴く〉から始める支援論』 筑摩書房
- 金田諦應 (2019) 『傾聴のコツ』 三笠書房
- 金田諦應 (2021) 『東日本大震災ー 3.11 生と死のはざままで』 春秋社
- 金田諦應 (2022a) 「『ケア』は『ケア』を意識した瞬間から『ケア』でなくなる」『JOINT』(公益社団法人トヨタ財団), 12-4.
- 金田諦應 (2022b) 「カフェデモンクニュースレター」 東北カフェデモンク資料
- 金田諦應 (2023) 「東日本大震災 傾聴移動喫茶カフェデモンクで学んだ傾聴のチカラ」 甲南大学文学部社会学科 2023 年度生活福祉論講義資料
- 金田諦應 (2024) 「生と死の狭間を歩くー東日本大震災と死生観・グリーフケアー」 上智大学総合人間科学部社会福祉学科 2024 年度社会福祉演習Ⅱ 講義資料
- 木原活信 (2003) 『対人援助の福祉エートスーソーシャルワークの原理とスピリチュアリティー』 ミネルヴァ書房
- 木原活信 (2010) 「社会福祉におけるスピリチュアリティー宗教と社会福祉の対話ー」『基督教研究』 78 (1), 17-41.
- 公益財団法人日本財団(2024)「18歳意識調査 第62回ー国や社会に対する意識調査(6ヵ国調査)ー」 報告書 (https://www.nippon-foundation.or.jp/wp-content/uploads/2024/03/new_pr_20240403_03.pdf, 2025.1.28)
- 厚生労働省 (1999) 「WHO 憲章における『健康』の定義の改正案について」 (https://www.mhlw.go.jp/www1/houdou/1103/h0319-1_6.html, 2025.1.24)
- 文部科学省 (2023) 「学生の自殺対策」『令和 5 年度 大学における死亡学生実態調査報告書』 (https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/gakuseishien/1290845_00002.htm, 2025.1.24)
- 日本ソーシャルワーカー連盟 (2020) 「ソーシャルワーカーの倫理綱領」 (<https://www.jfsw.org/code-of-ethics/>, 2025.1.24)
- 西平直 (2003) 「スピリチュアリティー再考ールビとしての『スピリチュアリティー』」『トランスパーソナル心理学 / 精神医学』 4 (1), 8-16.
- 小原眞知子 (2019) 「第 1 章 ソーシャルワークの体系」 木村容子・小原眞知子編『しっかり学

べる社会福祉② ソーシャルワーク論』ミネルヴァ書房

- 岡田圭 (2024) 『いのちに驚く対話－死に直面する人と、私たちは何を語り合えるのか－』医学書院
- 大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方－研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会
- 島野麻里子・三原博光 (2014) 「終末期の患者に対する心理社会的支援の検証－医療ソーシャルワーカーの支援事例から－」『人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌』14 (1), 123-28.
- 島藺進 (2010) 「救済からスピリチュアリティへ－現代宗教の変容を東アジアから展望する－」『宗教研究』84 (2), 127-54.
- Tillich, P. (1964) *Die Frage nach dem Unbedingten, Schriften zur Religionphilosophie, Gesammelte Werke Band V*, Evangelisches Verlagswerk, Stuttgart. (=1979, 野呂芳男訳『ティリッヒ著作集第4巻 絶対者の問い』白水社)
- 上田直宏 (2006) 「学生のもつスピリチュアルペインの構成概念とその表出」『関西学院大学社会学部紀要』101, 143-59.
- 脇本平也 (1997) 『宗教学入門』講談社
- 鷺田清一 (2015) 『『聴く』ことの力－臨床哲学試論－』筑摩書房
- Wilber, K. (1950) *A Brief History of Everything*. (=1996, 大野純一訳『万物の歴史』春秋社)
- Wilber, K. (2006) *Integral Spirituality, A Startling New Role for Religion in Modern and Postmodern World* (=2008, 松永太郎訳『インテグラル・スピリチュアリティ』春秋社)
- 安井優子 (2018) 「東日本大震災による死別体験者が苦しみの中で求めるもの－スピリチュアリティの視点からの考察－」『社会福祉学』59 (3), 55-68.
- 安井優子 (2019) 「ソーシャルワークにおける Spiritually-Sensitive とは何か」『キリスト教社会福祉学研究』52, 46-57.

Creating a Place for Interbeing with University Students' Spiritual Pain : Through the Yotsuya Café de Monk Sōfūan

Yuko Yasui

Abstract : The purpose of this paper is to clarify the meaning of the place in the Department of Social Welfare at our university, based on the activity records of “Yotsuya Café de Monk Sōfūan” (hereinafter referred to as Sōfūan) , which the author opened in the research room after joining the department in April 2024. This paper examines the background of Café de Monk, the origin of Sōfūan, the student visitations from April 2024 to the end of December, and their practices, drawing on relevant literature. The results indicate that Sōfūan's activities are a practice of creating a “place that gives fundamental meaning to human beings” (Kihara 2003:178) , and the existence of this place in our department is significant in demonstrating the meaning of social work. Furthermore, Sōfūan, appears to be becoming a safe place for social work students who share the common theme of internships. In the future, it is necessary to continue the practice, conduct further research, and reconsider the meaning of this place in our department.

Keywords : University students, Spiritual pain, Spirituality, Café de Monk, Place